

祥龍寺史概略

摂津国武庫郡都賀庄篠原村・祥龍寺は、郡内でも高みにあって、ちぬの海を見下し、大阪、堺、兵庫、須磨の一の谷まで一眸の中に収まる勝邑の地である。

高燥にして水利のよいこの地に、往古から集落が営まれ、中世には都賀庄の政所が、この地形の上におかれていた事でも知られている。

戦時中に供出した釣鐘（正徳二年・一七一二年 铸造）の銘によると、「広国山祥龍寺は、法道仙人（六四九年頃）の開基によるもので、平清盛が福原に都を移した頃、寺運盛んで広く世に栄顯していたが、年所を経て殿堂荒廢し、唯仙人作地藏菩薩と掌善、掌悪の二童形を残すのみとなった。元禄九年（一六九六年）監院即宗の時、防長二州の主、毛利吉広公大檀越となって、頗る禅林を成す」とある。

以後の記録で祥龍寺が古文書に現われた最初のもは、「旧天城文書」と云われる古文書の中の「都賀庄寺庵帳」であろう。「旧天城文書」とは都賀庄に於ける文明から天正年間の年貢取立て地検帳の

しかし、この繁栄も束の間で終り、この後、一年の火災に罹りて忽ち祥龍寺は堂舎灰燼となってしまふ。

寛政十年（一七九八年）に出た「摂津名所図会」にはすでに「祥龍廢寺」として紹介されている。

碧層軒五葉愚溪老師。諱は恵忠。安政六年八月十四日豊後国南海部郡八幡村字戸穴に生まる。明治四十年十月、神戸祥福寺僧堂住職となる。後、大正十三年五月大本山に入寺開堂をなして、妙心寺派第五百五十一世管長に就任。翌十四年五月宮中豊明殿にて御陪食の栄を賜う。昭和二年六甲山麓に宝珠山祥龍寺を再興し、自ら中興開山となる。昭和十九年三月奄然として遷化、寿八十六才。

碧層軒老師が、偶々摩耶山下に、昔の広国山祥龍寺の遺蹟を発見、この奇縁によって計らずも、時と人を得、明治の排仏棄釈以来五十有余年にし

て祥龍寺再興の機運が熟したのである。寄進者の中に、当時の神戸市長小寺謙吉、大正年間、三井、三菱と天下を三分した、鈴木商店の鈴木よね女史、その他、兼松商店、藤井忠兵衛、米澤吉次郎等々、まさに神戸の政界・財界を網羅

類であるが、その中に初めて祥龍寺の名が見える。又、「西撰大観」に「若林家由緒書」が明らかにされているので、その中から祥龍寺関係と、一部興味深いものを掲載する。

「保元の頃（一一五六年）篠原村北山に荒熊武藏守興定城をかまえ、落城の後若林隼人尉範房茲に居城す」と云う。「恐らく祥龍廢寺後の山嶺稍々夷かな所、北山城址ならん」とあるので今の牛小屋山から伯母野の辺であろう。

次に、「広国山祥龍寺（中略）右者往古より有来り開基年歴相知不申候寛永五年（一六二八年）に入院仕同二十癸未年迄住職覚玄、寛文八申年（一六六八年）より一夢と申す道心者堂守に差置五、六年羅在相果候以後地主文左衛門支配仕候」がある。

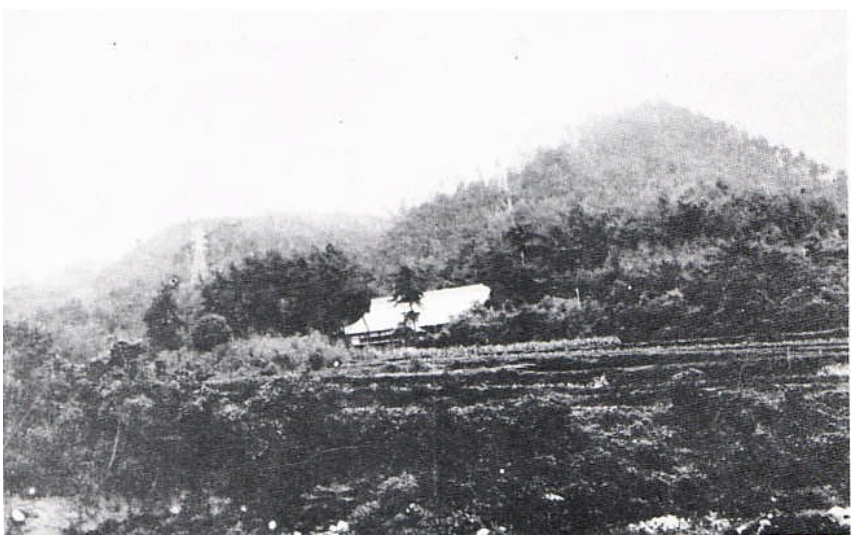
承応三年（一六五四年）中国より隠元禪師来朝、沈滞していた日本仏教界に一大センセイションを巻き起こす。

この時、臨済宗系より黄檗山に転ずる寺院多くこの頃、祥龍寺も萬福寺の傘下に組入れられ、黄檗山から監院として即宗和尚が管理したものであろう。この即宗和尚、及び鉄禅和尚の力で、毛利吉広公の帰依を得て再び禅林として盛えた。

した感がある。碧層軒老師の人徳というべきであらう。

現在、住職は、二世碧堂宗信、三世謙堂応峰、四世玄鑑太郎、五世悠山靖玄と続いている。

（平成十四年 記述・平成二十三年 更新）



昭和初年の祥龍寺

臨濟宗妙心寺派・宝珠山 祥龍寺
〒657-0068 神戸市灘区篠原北町三丁目六―二
電話・078-1188-1160
FAX・078-1188-1160